日蓮大聖人御書全集

南条兵衛七郎殿御書

なんじょうひょうえしちろうどのごしょ

新版
1824
〜
1831

南条兵衛七郎殿御書

文永元年（'64）12月13日　43歳　南条兵衛七郎

御所労の由承り候は、まことにてや候らん。世間の定めなきことは、病なき人も留まりがたきことに候えば、まして病あらん人は申すにおよばず。ただし、心あらん人は、後世をこそ思いさだむべきにて候え。また後世を思い定めんことは、私にはかないがたく候。一切衆生の本師にてましますの教えこそ、本にはなり候べけれ。

しかるに、仏の教え、またまちまちなり。人の心の不定なるゆえか。

しかれども、釈尊の説教、五十年にはすぎず。さきの四十余年の間の法門に、華厳経には「心、仏および衆生、この三つは差別無し」、阿含経には「苦・空・無常・無我」、大集経は「染浄融通」、大品経には「混同して無二なり」、双観経・観経・阿弥陀経等には「極楽に往生す」。これらの説教は、みな正法・像法・末法の一切衆生をすくわんがためにこそとかれはんべり候いけめ。

しかれども、仏いかんがおぼしけん、無量義経に「方便力をもって、四十余年にはいまだ真実を顕さず」ととかれて、先四十余年の往生極楽等の一切経は親の先判のごとくくいかえされて、「無量無辺不可思議阿僧祇劫を過ぐるとも、終に無上菩提を成ずることを得ず」といいきらせ給いて、法華経の方便品に、重ねて「正直に方便を捨てて、ただ無上道を説くのみ」ととかせ給えり。方便をすてよととかれてはんべるは、四十余年の念仏等をすてよととかれて候。

確悔返

こうたしかにくいかえして、実義をさだむるには、「世尊は法久しくして後、要ず当に真実を説きたもうべし」「久しくこの要を黙して、務めて速やかには説かず」等とさだめられしかば、多宝仏大地よりわきいでさせ給いて「このこと真実なり」と証明をくわえ、十方の諸仏八方にあつまりて広長舌相を大梵天宮につけさせ給いき。二処三会、二界八番の衆生、一人もなくこれをみ候いき。

これらの文をみ候に、仏教を信ぜぬ悪人・外道はさておき候いぬ、仏教の中に入り候いても、爾前権教の念仏

等を厚く信じて、十遍・百遍・千遍、一万乃至六万等を一日にはげみて、十年二十年のあいだにも南無妙法蓮華経と一遍だにも申さぬ人々は、先判に付いて後判をもちいぬ者にては候まじきか。これらは、仏説を信じたりげには我が身も人も思いたりげに候えども、仏説のごとくならば、不孝の者なり。

故に、法華経の第二に云わく「今この三界は、皆これ我が有なり。その中の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり。しかるに今この処は、諸の患難多し。ただ我一人のみ、能

く救護をなす。また教詔すといえども、信受せず」等云々。
この文の心は、釈迦如来は我ら衆生には親なり師なり主
なり。我ら衆生のためには、阿弥陀仏・薬師仏等は、主に
てはましませども、親と師とにはましまさず。ひとり三徳を
兼ねて恩ふかき仏は、釈迦一仏にかぎりたてまつる。親も
親にこそよれ、釈尊ほどの親、師も師にこそよれ、主も主
にこそよれ、釈尊ほどの師・主はありがたくこそはべれ。
この親と師と主との仰せをそむかんもの、天神地祇にすて
られたてまつらざらんや。不孝第一の者なり。故に、「また

教詔すといえども、信受せず」等と説かれたり。たとい、爾前の経につかせ給いて百千万億劫行ぜさせ給うとも、法華経を一遍も南無妙法蓮華経と申させ給わずば、不孝の人たる故に、三世十方の聖衆にもすてられ、天神地祇にもあだまれ給わんか〈これ一〉。

たとい五逆十悪・無量の悪をつくれる人も、根だにも利なれば、得道なることこれあり。提婆達多・鴦崛摩羅等これなり。たとい根鈍なれども、罪なければ得道なることこれあり。須利槃特等これなり。我ら衆生は、根の鈍なるこ

須利槃特過もの色形弁

と、すりはんどくにもすぎ、物のいろかたちをわきまえざること、羊目のごとし。貪・瞋・癡きわめてあつく、十悪は日々におかし、五逆をばおかさざれども、五逆に似たる罪、また日々におかす。

また十悪五逆にすぎたる謗法は人ごとにこれあり。させる語をもって法華経を謗ずる人はすくなけれども、人ごとに法華経をばもちいず。またもちいたるようなれども、念仏等のようには信心ふかからず。信心ふかき者も、法華経のかたきをばせめず。いかなる大善をつくり、法華経を千万部

読み書写し、一念三千の観道を得たる人なりとも、法華経のかたきをだにもせめざれば得道ありがたし。たとえば、朝につかうる人の、十年二十年の奉公あれども、君の敵をしりながら奏もせず、私にもあだまずば、奉公皆うせて、還ってとがに行われんがごとし。当世の人々は謗法の者としろしめすべし〈これ二〉。

仏入滅の次の日より千年をば正法と申して、持戒の人多く、得道の人これあり。正法千年の後は像法千年なり。破戒の者は多く、得道すくなし。像法千年の後は末法万年な

り。持戒もなし、破戒もなし、無戒の者のみ国に充満せん。
しかも濁世と申してみだれたる世なり。清世と申してすめる世には、直縄のまがれる木をけずらするように、非をすて是を用いるなり。正像より五濁ようよういできたりて、末法になり候えば五濁さかりにすぎて、大風の大波をおこしてきしをうつのみならず、また波と波とをうつなり。見濁と申すは、正像ようようすぎぬれば、わずかの邪法の一つをつたえて無量の正法をやぶり、世間の罪にて悪道におつるものよりも、仏法をもって悪道に堕つるもの多しと

見

みえはんべり。

しかるに、当世は、正像二千年すぎて末法に入って二百余年、見濁さかりにして、悪よりも善根にて多く悪道に堕つべき時刻なり。悪は、愚癡の人も悪としれば、したがわぬ辺もあり。火を水をもってけすがごとし。善は、ただ善と思うほどに、小善に付いて大悪の起こることをしらず。ゆえに伝教・慈覚等の聖跡あり、すたれ、あばるれども、「念仏堂にあらず」といいてすておきて、そのかたわらに新あたらしく念仏堂をつくり、かの寄進の田畠をとりて

念仏堂によす。これらは、像法決疑経の文のごとくならば、功徳すくなしと見えはんべり。これらをもちてしるべし。善なれども、大善をやぶる小善は、悪道に堕つるなるべし。今の世は末法のはじめなり。小乗経の機、権大乗経の機、みなうせはてて、ただ実大乗経の機のみあり。小船には大石をのせず。悪人・愚者は大石のごとし。小乗経ならびに権大乗経・念仏等は小船なり。大悪瘡の湯治等は、病大なれば小治およばず。末代濁世の我らには、念仏等は、たとえば、冬、田を作るがごとし。時があわざるな

ねんぶつどう　寄　ぞうほうけつぎきょう　もん　くどく　み　知　ぜん　だいぜん　破　しょうぜん　あくどう　お　いま　よ　まっぽう　初　しょうじょうきょう　き　ごんだいじょうきょう　き　失　果　じつだいじょうきょう　き　しょうせん　たいせき　載　あくにん　ぐしゃ　たいせき　しょうじょうきょう　ごんだいじょうきょう　ねんぶつとう　しょうせん　だいあくそう　とうじとう　やまいだい　しょうじ　まつだいじょくせ　われ　ねんぶつ　とう　ふゆ　た　つく　とき　合

り〈これ三〉。

国をしるべし。国に随って人の心不定なり。たとえば、江南の橘の淮北にうつされてからたちとなる。心なき草木すらところによる。まして心あらんもの、何ぞ所によらざらん。

されば、玄奘三蔵の西域と申す文に天竺の国々を多く記したるに、国の習いとして、不孝なる国もあり、孝の心ある国もあり。瞋恚のさかんなる国もあり、愚癡の多き国もあり。一向に小乗を用いる国もあり、一向大乗を用いる

国もあり、大小兼学する国もありと見え侍り。また一向に殺生の国、一向に偸盗の国、また穀の多き国、また粟等の多き国、不定なり。

そもそも日本国はいかなる教えを習ってか生死を離るべき国ぞと勘えたるに、法華経に云わく「如来滅して後において、閻浮提の内に、広く流布せしめて、断絶せざらしめん」等云々。この文の心は、法華経は南閻浮提の人のための有縁の経なり。弥勒菩薩云わく「東方に小国有り。ただ大機のみ有り」等云々。この論の文のごときは、閻浮提の

内にも、東の小国に大乗経の機あるか。肇公、記して云わく「この典、東北の小国に有縁なり」等云々。法華経は東北の国に縁ありとかかれたり。安然和尚云わく「我が日本国には皆大乗を信ず」等云々。恵心、一乗要決に云わく「日本一州、円機純一なり」等云々。

釈迦如来・弥勒菩薩・須梨耶蘇摩三蔵・羅什三蔵・僧肇法師・安然和尚・恵心先徳等の心ならば、日本国は純らに法華経の機なり。一句一偈なりとも行ぜば、必ず得道なるべし。有縁の法なるが故なり。たとえば、くろがねを磁石

のすうがごとし。方諸の水をまねくにたり。念仏等の余善は無縁の国なり。磁石のかねをすわず、方諸の水をまねかざるがごとし。故に、安然、釈して云わく「もし実乗にあらずんば、恐らくは自他を欺かん」等云々。この釈の心は、日本国の人に法華経にてなき法をさずくるもの、我が身をもあざむき、人をもあざむく者と見えたり。されば、法は必ず国をかんがみて弘むべし。彼の国によかりし法なれば必ずこの国にもよかるべしとは思うべからず〈これ四〉。また、仏法流布の国においても前後を勘うべし。仏法を

弘むる習い、必ずさきに弘まりける法の様を知るべきなり。例せば、病人に薬をあたうるには、さきに服したる薬の様を知るべし。薬と薬とがゆき合ってあらそいをなし、人をそんずることあり。仏法と仏法とがゆき合ってあらそいをなして、人を損ずることのあるなり。さきに外道の法弘まれる国ならば、仏法をもってこれをやぶるべし。仏の印度にいでて外道をやぶり、まとうが・じくほうらんの震旦に来って道士をせめ、上宮太子和国に生まれて守屋をきりしがごとし。

ひろ　なら　かなら　前　ひろ　ほう　よう　し
れい　びょうにん　くすり　与　ふく　くすり
よう　し　くすり　くすり　行　あ　争　ひと
損　ぶっぽう　ぶっぽう　行　あ　争
ひと　そん　げどう　ほうひむ
くに　破　ぶっぽう　ほとけ　いんど
出　げどう　破　摩　騰　迦　竺　法　蘭　しんたん　きた
どうし　責　じょうぐうたいしわこく　う　もりや　斬

仏教においても、小乗の弘まれる国をば、大乗経をもってやぶるべし。無著菩薩の世親の小乗をやぶりしがごとし。権大乗の弘まれる国をば、実大乗をもってこれをやぶるべし。天台智者大師の南三北七をやぶりしがごとし。しかるに、日本国は、天台・真言の二宗のひろまりて今に四百余歳、比丘・比丘尼・うばそく・うばいの四衆、皆、法華経の機と定まりぬ。善人・悪人、有智・無智、皆、五十展転の功徳をそなう。たとえば、崑崙山に石なく、蓬莱山に毒なきがごとし。

仏教(ぶっきょう)においても、小乗(しょうじょう)の弘(ひろ)まれる国(くに)をば、大乗経(だいじょうきょう)をもってやぶ破るべし。無著菩薩(むじゃくぼさつ)の世親(せしん)の小乗(しょうじょう)をやぶりしがごとし。権大乗(ごんだいじょう)の弘(ひろ)まれる国(くに)をば、実大乗(じつだいじょう)をもってこれをやぶるべし。天台智者大師(てんだいちしゃだいし)の南三北七(なんさんほくしち)をやぶりしがごとし。しかるに、日本国(にほんこく)は、天台(てんだい)・真言(しんごん)の二宗(にしゅう)のひろまりて今(いま)に四百余歳(しひゃくよさい)、比丘(びく)・比丘尼(びくに)・優婆塞(うばそく)・優婆夷(うばい)の四衆(ししゅ)、皆(みな)、法華経(ほけきょう)の機(き)と定(さだ)まりぬ。善人(ぜんにん)・悪人(あくにん)、有智(うち)・無智(むち)、皆(みな)、五十展転(ごじってんでん)の功徳(くどく)をそなう具。たとえば、崑崙山(こんろんざん)に石(いし)なく、蓬莱山(ほうらいさん)に毒(どく)なきがごとし。

しかるを、この五十余年に、法然という大謗法の者いできたりて、一切衆生をすかして、珠に似たる石をもって珠を投げさせ、石をとらせたるなり。止観の五に云わく「瓦礫を貴んで明珠なりとす」と申すはこれなり。一切衆生、石をにぎりて珠とおもう。念仏を申して法華経をすてたる、これなり。このことをば申せば、還ってはらをたち、法華経の行者をのりて、ことに無間の業をますなり〈これ五〉。

ただし、とのはこのぎをきこしめして、念仏をすて法華経にならせ給いてはべりしが、定めてかえりて念仏者にぞな

らせ給いてはべるらん。法華経をすてて念仏者とならせ給わんは、峰の石の谷へころび、空の雨の地におつるとおぼせ。大阿鼻地獄疑いなし。大通結縁の者の三千塵点劫を、久遠下種の者の五百塵点を経しこと、大悪知識にあいて法華経をすてて、念仏等の権教にうつりし故なり。一家の人々、念仏者にてましましげに候いしかば、さだめて念仏をぞすすめまいらせ給い候らん。我が信じたることなればそれも道理にては候えども、悪魔の法然が一類にたぼらかされたる人々なりとおぼして、大信心を起こし、御用いある

べからず。大悪魔は貴き僧となり、父母・兄弟等につきて、人の後世をばさうるなり。いかに申すとも、法華経をすてよとたばかりげに候わんをば、御用いあるべからず。

まず御きょうざくあるべし。念仏、実に往生すべき証文つよくば、この十二年が間、「念仏者、無間地獄」と申すをば、いかなるところへ申しいだしてもつめずして候べきか。よくよくゆわきことなり。法然・善導等がかきおきて候ほどの法門は、日蓮らは十七・八の時よりしりて候いき。このごろの人の申すこと、これにすぎず。結句

は法門はかなわずして、よせてたたかいにし候なり。念仏者は数千万、かとうど多く候なり。日蓮はただ一人、かとうどは一人もこれなし。今までもいきて候はふかしぎなり。

今年も十一月十一日、安房国東条の松原と申す大路にして、申酉時、数百人の念仏等にまちかけられ候いて、日蓮はただ一人、十人ばかり、ものの要にあうものはわずかに三・四人なり。いるやはふるあめのごとし、うつたちはいなずまのごとし。弟子一人は当座にうちとられ、二人は

大事のてにて候。自身もきられ打たれ、結句にて候いしほどに、いかが候いけん、うちもらされていままでいきてはべり。いよいよ法華経こそ信心まさり候え。第四の巻に云わく「しかもこの経は、如来の現に在すすらなお怨嫉多し。いわんや滅度して後をや」。第五の巻に云わく「一切世間に怨多くして信じ難し」等云々。日本国に、法華経よみ学する人これ多し。人のめをねらい、ぬすみ等にて打ちはらる人は多けれども、法華経の故にあやまたるる人は一人もなし。されば、日本国の持経者は、いまだこの経文にはあ

わせ給わず。ただ日蓮一人こそよみはべれ。「我は身命を愛せず、ただ無上道を惜しむのみ」、これなり。されば、日蓮は日本第一の法華経の行者なり。

もしさきにたたせ給わば、梵天・帝釈・四大天王・閻魔大王等にも申させ給うべし。「日本第一の法華経の行者・日蓮房の弟子なり」となのらせ給え。よもほうしんなきことは候わじ。ただし、一度は念仏、一度は法華経となえつ。二心ましまし、人の聞きにはばかりなんどだにも候わば、よも、「日蓮が弟子」と申すとも御用い候わじ。後にうらみ

させ給うな。ただし、また法華経は今生のいのりともなり候なれば、もしやとしていきさせ給い候わば、あわれ、とくとく見参して、みずから申しひらかばや。語はふみにつくさず、ふみは心をつくしがたく候えば、とどめ候いぬ。恐々謹言。

文永元年十二月十三日　　日蓮　花押

南条七郎殿